



学校法人  
鎌倉女子大学

## 日本高等教育学会第27回大会を開催して

5月25日（土）・26日（日）に大船キャンパスにおいて日本高等教育学会第27回大会が開催されました。この学会は、高等教育に関する研究の理論的・方法論的基礎を強化することを目指した学会であり、今回の大会では全国から300名近くの研究者・政策担当者・大学関係者が参加し、19部会65件の自由研究発表、学会主催の二つの課題研究、大会校企画の公開シンポジウム等が開催されました。

学会のような学術的なイベントを大学で開催することの目的の一つは、一つの場所に研究者が一堂に集うことで研究者間の交流がより一層深まり、新たな知のネットワークが生まれることにあるように思います。今回の大会では、本学のコミュニティモール、ラーニングコモンズ、食堂棟（カンティーン）をはじめとする充実した施設を活かし、留学生・外国人研究者との交流などを目的としたランチミーティングやポスター発表が実施されるとともに、学会としては5年ぶりとなる懇親会も開催されました。同時に、コロナ禍において発展したオンラインツールも積極的に活用され、イギリスや台湾の研究者が現地から同時中継で口頭発表やポスター発表を行うセッションも設けられるなど、新たな国際交流の形が垣間見られるイベントとなりました。

学会大会の運営にあたっては、大会実行委員会、教職員とともに、15名の学生スタッフが終始丁寧に対応し、学会の円滑な運営に大きく貢献しました。学会参加者からは、本学の緑豊かな美しいキャンパスへの賛辞とともに、本学の学生スタッフの機敏な対応に対する多くの称賛が寄せられました。

5月26日には、鎌倉市教育長の高橋洋平先生、玉川大学学長／玉川学園副学園長の小原一仁先生、情報・システム研究機構監事／日本技術者連盟会長（芝浦工業大学元学長）の村上雅人先生、大阪大学特任教授の川嶋太津夫先生をお招きした公開シンポジウム『教育の連続性を考える：初等中等教育と高等教育の接続』が開催され、オンラインで一般の参加者にも配信が行われました。本学の一部の学生も視聴してくださったようです。VUCAの時代（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）とも形容される、変動が激しく先行きが不透明で予測困難な時代において、既存の教育制度はどのような対応が迫られているのか。技術革新によって人々の学びはどのように変化し、今後の教員にはどのような資質が必要とされてくるのか。また、そのような時代における高大連携や高大接続のあり方は……。こうしたさまざまな問いに対する深い洞察が講演者から提供され、参加者が熱心に耳を傾けました。

幼児期から生涯にわたって続く人々の学びに、制度としては区分けされている各学校種

の教育がどのように貢献していくことができるのか考えさせられるシンポジウムでありました。シンポジウムを拝聴しながら、ふと、以前読んだ『サイロ・エフェクト：高度専門化社会の罠』という本を思い出しました。本書は、文化人類学者であり、ファイナンシャル・タイムズ紙の編集長を務めたイギリス人ジャーナリストのジリアン・テット氏の著作です。本書において、氏は、企業であれ、自治体であれ、現代社会におけるあらゆる組織は効率化、説明責任、有効性の名の下にそれぞれの部門が分業化し、壁を作っていく傾向があることを指摘し、これを「サイロ・エフェクト」と名付けました。そして、サイロ<sup>※</sup>というものは、複雑化する社会に効率的に対応するためには必要であるものの、その一方で、自身の属するサイロに閉じこもり、その外で何が起きているか知らず、知ろうともしない態度は往々にしてリスクやチャンスを見逃す可能性があることを述べています。

教育分野も例外ではなく、各学校種が連携することでどのような新しいチャンスを見つけていくことができるのか。研究分野においても異なる科学分野の知識、利害関係者や市民の知識を組み合わせることによってどのような新しい価値を創造できるのか。昨年、80周年を迎え、次の10年、20年に向けて新たな一歩を踏み出した本学にとっても、より一層の発展につなげるための刺激をいただいたように思います。

※サイロとは牧草地に見られる家畜飼料を保管する円筒状の貯蔵庫のことをさす。

(大会実行委員長 学術研究所教授 福井 文威)

[>前のページへ戻る](#)